

関西財界の巨頭として近代化を推進、内国勧業博覧会も誘致

土居通夫

実業家

一八三七年（天保八年）
一九一七年（大正六年）



明治36年（1903）、土居通夫は、それまで東京や京都で開かれていた「内国勧業博覧会」を大阪に誘致し、空前の規模となった博覧会を開いた。

国立国会図書館

土居通夫は天保8年（1837）、宇和島藩の下級武士の6男に生まれた。勤皇を志して脱藩した彼は、維新後、薩摩出身の五代友厚のもとで敏腕を振るい、明治2年（1869）には大阪府権少参事になった。

明治5年（1872）、上京して司法界に入り、裁判所長にまで上りつめたが、同17年（1884）、大阪の大富豪・鴻池家の顧問を引き受けたのをきっかけに、実業の世界に身を投じ、「大阪電燈会社」をはじめ、鉄道、銀行、新聞、紡績など、勃興期にあった近代産業を数多く経営、育成することとなった。

明治28年（1895）には大阪商工会議所の第7代会頭に選ばれ、終生その職にあったが、なんといっても土居の名を全国に知らしめたのは、「第5回内国勧業博覧会」である。パリ万博を視察した土居は、大阪開催に向けて積極的に誘致を働きかけ、開催が決まると、それまでの物産紹介を中心としたものから、最新の科学文明を紹介し、娯楽性のあるものを加えた博覧会としたため、入場者数は534万人を記録した。閉会后、跡地の一部は通夫が経営していた大阪土地建物会社により、「新世界ルナ・パーク」として生まれ変わり、そこに建てられた通天閣は「商都大阪のシンボル」として多くの人に愛された。

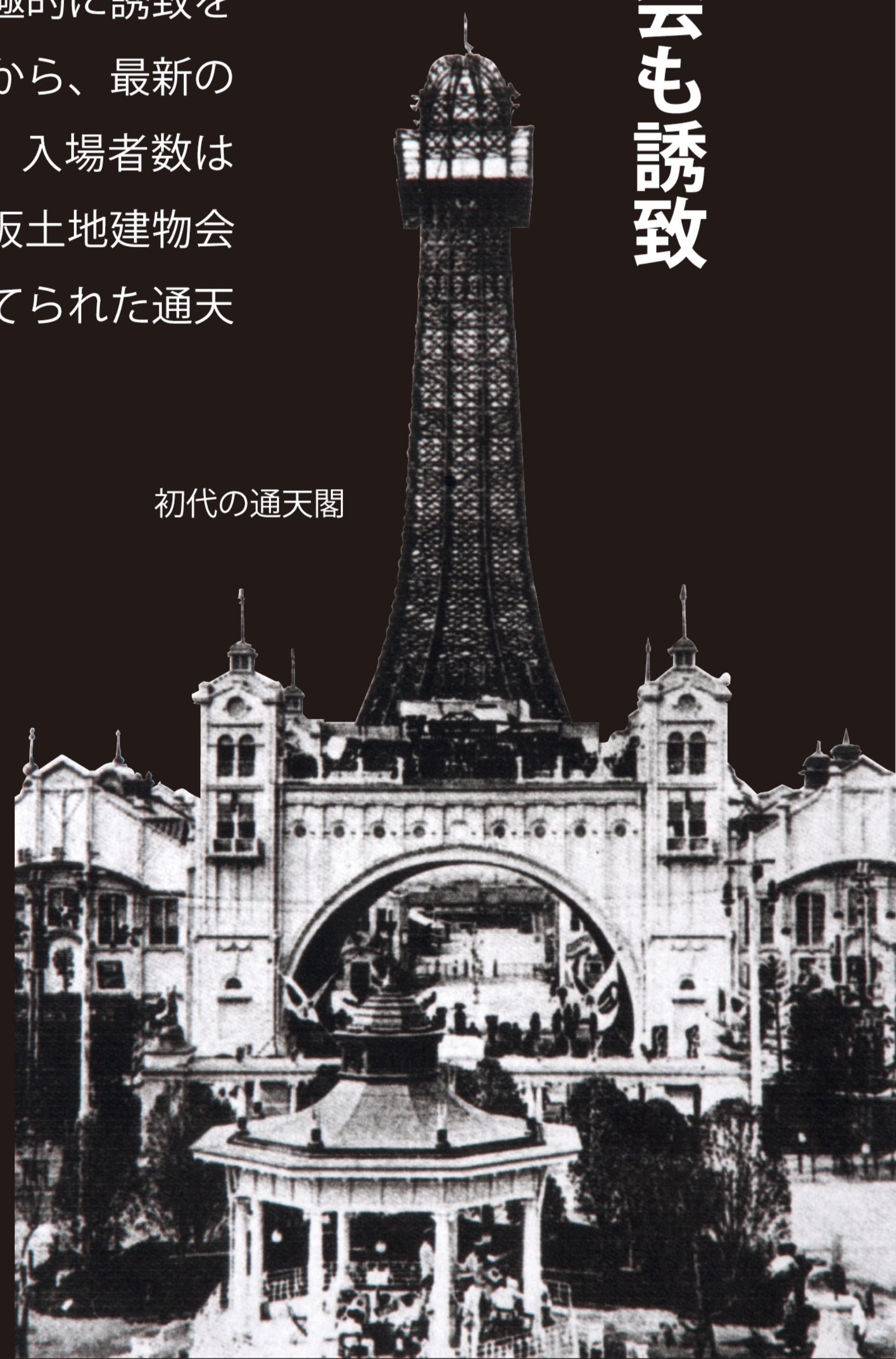


土居通夫



土居通夫が社長を務めた大阪電燈株式会社

国立国会図書館



初代の通天閣